［潤生園ニュースレター］
vol. 7
2024

うるる

特集

関わりの中で人は育つ

ケアに携わる専門職の成長を見守り
チャレンジをサポートする方々に
お話を伺ってきました。

対談

共に支え合う社会のヒント［前編］

織田友理子（一般社団法人 WheeLog 代表理事・潤生園評議員）× 時田佳代子（潤生園理事長）

関わりの中で、人は育つ

潤生園と人　安倍有輝さん

はじめに

お年寄りにとって最高の環境は、
私たち職員自身なのです。
どうかお年寄りを「安心のバリアー」で
包んであげて頂きたいのです。

（『潤生園の原点』所収「職員自身が最高の環境となる」より）

創設期にまで遡る、潤生園の人材育成の歴史。
その理念を今に引き継ぐ人財育成センターの仕事、
そして、障害がある人の社会参加を支える志と
テクノロジーの融合について取材しました。

うるる編集部

1978年の設立以来、潤生園のあゆみは常に人材育成と共にあった。1992年には日本で初めて社会福祉法人による人材養成事業（神奈川県認可）を手がけ、現在も自法人内に人材育成の専門部署である人財育成センターを持つ。

人財育成センターのセンター長を務める安倍有輝さんに、研修開催の合間を縫ってお話を伺った。『信頼できる施設』の条件の一つは、職員の評価制度と教育制度の充実」と安倍さんは静かに断言する。

大切なのは「相手がどう感じるか」

潤生園の研修システムは手厚い。たとえば新入職員の入社時研修は3ヶ月間。介護に必須な基礎技術や知識を身につける「初任者研修」のカリキュラムが内包されている。

新入職員研修に含まれる技術研修「ベッドの上での体位変換」を、安倍さんの講義で体験させていただいた。

「寝ている人の体の向きを変える時、ベッドと体が接する面をなるべく少なくすることが必要です。体をつかむとき、指は使いません。指先に力を入れると、そこだけに圧が集中して痛みを与えてしまったり、アザになってしまうこともある。必ず指をそろえて、手のひら全体を使って、体の下から支えるように手を差し入れます」。安倍さんの落ち着いた声が研修室に静かに響く。

今度は車椅子の操作を行ってみようと、研修室から外に出た。実際の研修では、車椅子のまま街にも出て行く。車椅子で移動する際の段差や店への入りづらさなどは、研修で経験して初めてその不便さに気づく職員も多いそうだ。

実際に車椅子に座ってみると、押す人が普通に歩いてもスピードを感じることに気づく。さらに安倍さんに促され、座面に正座して手を前に組んで乗ってみる。「これで押す人が黙ったままだったら、足の力が入らず手も思い通りに動かせないご利用者はどう感じるでしょう」。車椅子の介助では、乗っている方への声かけも重要なのだ。「大切なのは『相手がどう感じるか』という視点を常に持つこと。ケアの場面ではもちろん、職場、生活、全てに通じることだと思います」。

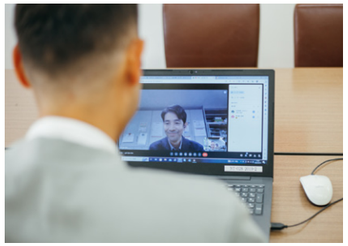
育てられた人が次の人を育てる

4月の集中研修を終えた新人たちは、5月からは現場に配属されてOJTと研修を交互に繰り返す。食事介助の研修を終えたら現場のOJTでも食事介助を、というように、研修と現場が足並みを揃えて一人の職員を育てていくのだ。この取り組みは安倍さんの主導でより体系化されたものに再設計され、2020年からは、現場の先輩職員が「プリセプター」（指導担当）として新人の独り立ちまでを並走している。後輩を育てることで、自らのケアを見直し、新たな視野と学びを得ることができる。「そうやって育てられた人が次のプリセプターになって、また次を育てる。その積み重ねがここ数年で形になってきたという実感があります」。若手の職員たちは非常に意欲的で、新しいことにどんどん挑戦してくれるんです、と安倍さんはうれしそうに微笑んだ。

年次が進むと、研修での学びは「専門職としての専門性の向上」に「チームコミュニケーション」が加わる。そして4年次の研修が終われば、現場をまとめるリーダーとしての土台が築かれる研修設計となっている。「研修が人材を育てているわけではなく、職員たちは、研修で学んだことを現場で実践し、周りの職員やご利用者とかかわる中で育っていきます。研修はそのためのヒントを得たり、その効果を実感する場として機能させたい」。

サポートできることはまだまだある

安倍さんが潤生園の人材育成を担って7年目。この法人で働くことが、職員一人ひとりの生活や人生をより良くする、そんな理想に向かって、安倍さんは今年からある挑戦を始めた。サポート制度として職員に対する「コーチング」を提供しているのだ。コーチングといってもなにかを強くリードするものではない。後悔や葛藤を伴うことの多い介護や福祉の仕事では、強い言葉や抑えられない感情に直面しても、自分一人で消化しようとすることも多い。コーチはそのような思いを、対面やオンラインでの対話を通してときほぐす。その人の考えや、内にある思いに耳を傾けて明確化し、めざす目標に向けてそっと背中を押す存在だ。「コーチングはダンスのようだ、と言われます。お互いに協力してこれからを見出していく。研修の場も実はそんな感じかもしれません。準備段階ではもちろんしっかりつくりこみますが、当日に残した余白で学びの場を一緒につくっていく感覚があります。教えるだけでなく研修参加者に教わることもたくさんあって、それがこの仕事の醍醐味の一つです」。



安倍さんは潤生園に就職して間もない時期から思いを共にする仲間をつくり、映像を用いた組織内の情報や、地域との交流の様子を積極的に発信する取り組みも始めた。この地域で生きる人々とリアルにかかわりながらでしか、困っている人を見過ごさない仕組みはつくれないと思うからだ。職員が自ら考えて行動できるように、それができる環境のために、サポートできることはまだまだある。

「前会長は、まさにチャレンジで歴史をつくってこられた方ですから、やはりその風土というか血のようなものを、受け継いでいきたいですね」。

安倍有輝さん

2017年、潤生園入社。大学で福祉を学び、他社で10年間有料老人ホームにて介護職として従事した後、潤生園にて人材育成を担当。現場と連携して研修やOJTのプログラム開発を担いつつ、職場環境の改善や地域との連携など多角的な取り組みでスタッフを育成する。

「人間の尊厳」を理念とするケアを育む

潤生園の人材育成に向き合う
職員たちの日誌です！

2023年11月1日 – 12月1日

記入者

関根晃一
人財育成センター兼人事部
勤続年数：3年
好きなこと：ソフトボール、飼っている陸亀の世話

西山墨
「みんなの家たじま」所長兼エリアマネジャー
勤務年数：20年
好きなこと：旅行

足立悠夏
所属：特養1課・介護職員
勤続年数：2年
好きなこと：美術鑑賞・温泉・愛猫家

奈良輪 大作
南足柄・北足柄・福沢地区地域包括支援センター所長
勤続年数：4年
好きなこと：温泉・銭湯巡り

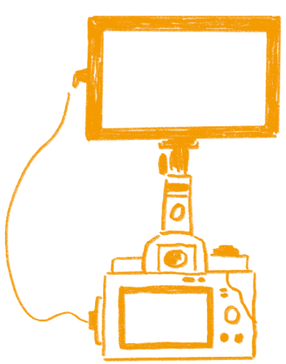
11月3日［金］
今日は、法人内ルールを職員に理解してもらうための再現動画「職員の約束」の撮影日。演じ手は介護職員Aさんと調理職員のBさん。ふたりともプロのカメラマンを前に緊張した面持ちだったが、撮影が始まると役になりきる名演技！さらに緊張が解けるとアドリブも飛び出し、表情はすでにプロの俳優のよう。社内規定の周知をするための職務として撮影に立ち会ったが、女優誕生！の瞬間を目撃するスリリングなひととき。［関根］

11月6日［月］
役職者向けの研修を受講しに「れんげの里」へ。休憩中、事業所から電話があり、ご利用者のN様がお一人でおでかけになったとのこと。関係者に連絡をするように指示を出し、研修を中座して事業所に戻って付近を探し歩いてみると、N様にばったり。お声を掛けると「やあ、どうしたの？」と笑顔で挨拶してくださり、胸を撫で下ろす。認知症になっても安心して暮らせる地域であることの大切さをかみしめる。［西山］

11月7日［火］
病院を退院されたT様のお宅を訪問すると、歩行器を使ってトイレまで移動されるT様の姿があった。数日前の退院前カンファレンスでは、T様の歩行機能の低下が顕著であるため、ポータブルトイレの準備をするようリハビリ担当者からの指示があったのだが、奥様が「寝室にトイレを置くのはちょっとね。夫はこれまでと同じようにトイレに行きたいとリハビリも頑張っています」と教えてくださる。ご本人と家族の思いを汲み取った相談支援を心がけていたが、T様とご家族の思いにふれ、支援者側の都合や思いを優先していなかったか、一緒に対応した職員とあらためて振り返った。［奈良輪］

11月8日［水］
今日は新人の職員Kさんのお誕生日。「おめでとう」とお祝いの言葉を伝えると「えぇっ！ありがとうございます！」と弾ける笑顔を見せてくれる。彼女のキラキラした笑顔は私にいつも元気をくれる。職場のほかの職員からも「今日はKさんの誕生日だよ！」「オメデトウ!!」と声をかけられていて、愛されているなぁ…と私の心までじんわりと温まる。［足立］

11月9日［木］
法人の理念を体現した仕事の実践を発表し合う『「潤生園の原点」実践発表大会』の来年の実施に向けた中間報告会に参加する。報告会には、大会に参加する予定の発表者、アドバイザー、実行委員がオンラインで出席し、会の冒頭では当法人の理事長より、大会実施の意義についてお話しがあった。昨年、亡くなられた前会長の遺志を継ぎ、第二創業期において、人の尊厳を大切にした実践をいかに積み上げていくか、事務局として新たに気が引き締まる思い。［関根］



11月10日［金］
圧迫骨折になったU様の支援について職員とともに振り返る。U様は独居のため、入院時の面談では施設入所を勧めたのだが「自宅に戻って生活したい」との本人の強い思いがあり、自宅退院となった。退院後の回復・改善はとても早く、レンタルしていた介護ベッドを返却し、ゴミ捨ての支援も終了となった。ご本人の強い気持ちや意欲が、ときに支援者のアセスメント以上の力を発揮すること、自立支援のあるべき姿についてセンター内であらためて再認識した。［奈良輪］

11月13日［月］
今月末に予定されている防災関連研修の内容確認をするため、防災委員会を開催した。ふだん自分から発言する機会が少ない委員会メンバーのFさんから「今度、地域の方向けに普通救命講習をやろうと思っているんです。午前で終われば午後は書道教室もやれるかな」と提案が上がった。どこか楽しげなFさんにそのワケを聞くと、以前受けた講習がきっかけでいろいろなことにチャレンジしてみたくなったのだそうだ。その変身ぶりがうれしい。［西山］

11月14・15日［火・水］
6つの社会福祉法人が合同してリーダー職員を育成するための宿泊研修（DRAW UP！研修）に参加。わが法人からは5名のリーダーが参加。5名とも今日までにほかの法人へ見学に行っており、研修では他法人の職員と意見を交わしながら、それぞれの職場の課題や強みに気づきを与え合っていた。リーダーとしての自覚をさらに高めるメンバーたちの姿が一段と頼もしい。［関根］

11月20日［月］
S様のお見送りの会を迎えた。新人職員Oさんには、職員を代表してのお手紙を読むという重役が任された。初めての仕事に「頑張ってみます」とパソコンに向かう。先輩職員にもS様の思い出を聞いて周り、自身の思い出もしたためる。こんなふうに関わった職員全員でご利用者の思い出を語り合う機会は大切だと思う。会が始まる前、Oさんの表情には緊張が漂っていたが、会が始まり、お手紙を読み上げる後ろ姿は堂々としていた。会場が温かい空気に包まれ、参加者した職員全員で晴れやかにS様をお見送りができたと思う。［足立］

11月21日［火］
昨日のお見送りの会を終え、1課職員でS様の生前のケアカンファレンスを行った。それぞれの職員が順番にそのケアで感じ、学んだことを伝え合っていく。手紙を作成し読み上げるという重役を担った新人職員Oさんも、ひと言ひと言を噛みしめるように思いの丈を語ってくれた。人をひとり、お見送りするというとても大きな仕事に対して彼なりの意義を見出していることがしっかりと伝わってきて嬉しかった。［足立］

11月24日［金］
全職員を対象に、介護倫理を学ぶ動画が毎月配信されている。動画を視聴した職員に感想を尋ねると「難しい内容で理解するのが大変ですけど、学ぶ機会がなかったのでうれしいです。みんなみたいに動画の再生速度を上げて見られないですけど」と笑いながら聞かせてくれた。ほかの職員にも再生速度について聞いてみると1.25倍速がちょうどいいとのこと。2倍速という声もあった。耳が慣れてくるのかな？［西山］

12月1日［金］
新規相談や担当ケースのケアマネジメント業務が毎月のように増えていく。先日は「このままでは地域包括支援センターではなく、介護予防プランセンターになってしまう」と職員からも心配の声があがり、悩ましい気持ちになっていたが、1on1面談※の際、職員のAさんから「どんなに忙しくても介護の問題に直面して困っている方の声に耳を傾け、安心して暮らせる地域づくりのため、地域にアウトリーチしていく時間をつくっていきたい」との思いを聞く。どのような状況の中でも、理想・目標を見失わず地道に取り組む姿勢と熱意に心打たれた。［奈良輪］

※1on1面談：上司（マネージャー）と部下が1対1で行う、定期的な面談。

潤生園からケアを考える

織田友理子 × 時田佳代子

一般社団法人WheeLog代表理事
潤生園評議員

潤生園理事長

共に支え合う社会のヒント【前編】

車いすユーザーの社会参加を応援する
バリアフリーマップ「WheeLog!」を運営する
一般社団法人WheeLog代表理事の織田友理子さんと一緒に、
さまざまな人たちが共に支え合う社会について考えます。

潤生園の評議員も務められる織田友理子さんと時田理事長

福祉を民主化する テクノロジーとの融合

時田　織田さんが発案した「みんなでつくるバリアフリーマップ〈WheeLog!〉」はインターネット上で、障害者も健常者も気軽にバリアフリー情報のマップづくりに参加することができます。福祉とテクノロジーが融合するこのアプリを開発したきっかけは、ご自身の旅の経験からだったそうですね。

織田　はい。私は大学4年生だった2002年に進行性の筋疾患「遠位型ミオパチー」と診断されました。出産してから車いす生活になり、子どもと一緒に海に行くことはできないだろうと諦めていたのですが、ある時、バリアフリーのビーチが茨城県の大洗にあることを知ったんです。行ってみたら本当に楽しくて、車いすでは行けないと思いこんでいた今まではなんだったんだろう、と世界が変わるような体験をしました。そこで、こういう情報を共有したいと思い、2014年頃からブログやYouTubeでの情報発信を始めました。動画編集などは知り合いが手伝ってくれていましたが、私が全国各地を回らないと情報発信できないようなスタイルはナンセンスだなと気づいたんです。そこで北海道から沖縄まで健常の人を含むたくさんの人にバリアフリー情報を投稿してもらって、情報共有し合えるプラットフォームをつくりたいと思ったのが、「WheeLog!」開発のきっかけでした。

時田　「WheeLog!」は投稿が簡単で、すぐに地図に反映され、バリアフリーの情報を提供した人とそれを見て実際に使った人のやりとりもあって、毎日でも見たくなります。なにより健常者が参加するときの心理的な壁がすごく低いことに驚きました。このアプリをスマホで初めて見た時「福祉の民主化」という言葉が浮かびました。

織田　それは本当に嬉しい言葉です。社会を変えるためには、一般の人たちがコミットしたくなる仕組みをつくらなければって思ったんです。

Wheelog! https://wheelog.com/

WheeLog!（ウィーログ）は、スマホやパソコンで使えるバリアフリーマップのアプリ。車いすで通れる道や、利用できる施設を見ることができる。ユーザー投稿型のアプリで、自分の体験した情報を投稿することもできる。

図版提供：一般社団法人 WheeLog

だれかにつながり「助けて」と言える場

時田　福祉を拡大するとき、情報って実はとても大事な要素ですよね。高齢者介護でいえば、介護情報なんていざというときまで全く必要がない。でも時がくれば、いきなり、一気にいろいろなこと決めなければいけない。その時、参考情報が手の届くところにあるかといったら、残念ながら今は全くないといってもいい状況なんです。

それで潤生園のサイトに「介護なんでも相談室」というページをつくりました。ケアの相談事例を見ることができるほ

自分たちの困りごとをわかってもらえない、と感じる障害者は多いと思いますが、それは私たちが何に困っているのかを知るきっかけがないだけだと思うんです。どういう形なら知って、協力してもらえるか。例えば「車いすマーク」がついているトイレは誰でも簡単に見つけられます。その写真一枚だけでも投稿してほしいんです、と言い続けたら「それだったらできる」と。車いすユーザーだけじゃなく、ふだん障害についてあまり考えない人にこそ入ってきてほしくて必死にアピールしました。

時田　「WheeLog!」がGoogle社という、デジタルテクノロジーを通じて世の中を良くしたいという理念を持つ企業の公募で受賞されたのは、その理念をまさに体現しているからですね（Googleインパクトチャレンジ2014、2015受賞）。「WheeLog!」の存在は福祉において本当に希望の光だと思います。

「介護なんでも相談室」https://kaigo-nandemosoudan.jp

か、電話やメールで相談を受け付けているんです。日本中から電話がかかってきます。

織田　それはすごい。みなさん、切実な相談があるでしょうから、お話にも時間がかかるのではないですか。

時田　長いと2時間くらいかかることもあります。切羽詰まった状況でお電話してきているので、簡単には切れないんですよ。「聞いてくれただけで、また明日もがんばれます」とほとんどの方がおっしゃいます。

織田　「WheeLog!」には、「つぶやき」や「リクエスト」という機能をつくったんです。知りたいことがあるときや助けてほしいとき、臆せずに「助けて」と言える状況を担保したくて。

人間の知恵を科学技術で解釈する

時田　「些細なことでも相談していい」という気軽さ、重要ですよね。本当に困ってからではなく、なるべく早い段階で問題を把握できれば、実は手段がいっぱいある。相談してみたら、見ず知らずの人から答えが返ってくる「WheeLog!」でのやりとりの積み重ねは本当に貴重だし、そういう場があることは社会の安心にもつながりますね。

織田　早めのタイミングで助けを求めてもらえ、解決した事例をわかりやすく見せられるしくみがあるといいですよね。あなたのためだけじゃないんだよ、その情報が誰かを助けるよ、と。AIの力を借りて、「WheeLog!」もまだまだ前進していきたいです。そして福祉に関してみんなが参加して情報を発信したり、情報をキャッチするのが当たり前というくらい、社会の助け合いが成熟していくことを願います。

織田友理子
（おだ・ゆりこ）

潤生園評議員、NPO法人PADM（遠位型ミオパチー患者会）代表、一般社団法人WheeLog代表理事
2002年、22歳の時に進行性の筋疾患「遠位型ミオパチー」と診断を受ける。2005年に結婚、翌2006年に出産。その年から車いすでの生活をスタート。中途障害者としての視点や車いすでの生活経験を生かし、アプリ「WheeLog!」を発案。福祉社会の構築に向けて講演など多彩な活動を行う。著書に『LOVE&SDGs 車いすでもあきらめない世界をつくる』（鳳書院）がある。

時田佳代子
（ときた・かよこ）

潤生園理事長
神奈川県小田原市生まれ。地元小田原でイタリアンレストランの開業・経営を経て、平成14年、社会福祉法人小田原福祉会に入職。平成30年より社会福祉法人小田原福祉会理事長。誰もが安心して暮らし続けられる地域づくりに従事する。認知症ケア事業協同組合理事長、全国地域包括ケアシステム連絡会理事。

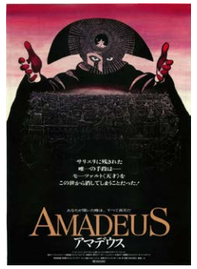
潤生園スタッフが薦める

BOOK & MOVIE

『三国志　北方謙三』

多数ある三国志本のなかでも登場人物の一人称視点でストーリーが展開されるのが特徴の本作。名前しか知らなかった武将一人ひとりの姿にハードボイルド作家、北方謙三ならではの視点が加えられています。読み始めたらもう止まらない、浴槽で号泣しながら3時間のめり込んだ記憶が残っています。普通の三国志に飽きてしまったベテラン読者の方々にも大変お勧めです。

著者:北方謙三　出版社:角川春樹事務所、1996年～1998年刊行(全13巻)



『アマデウス』

モーツァルト(1756～1791)の半生をフィクションを織り交ぜて描き、日本では1985年に公開されるや大ヒットした映画。オーストリア皇帝ヨーゼフ2世に仕える作曲家だったサリエリが精神病院の病床で告白する、モーツァルトの死の秘密。天才に翻弄されたサリエリの人生が、複雑な心情を軸にミステリアスに描かれ、モーツァルトのイメージが変わるでしょう。いま、あらためて見たい名作です。

監督:ミロス・フォアマン　製作:1984年、アメリカ合衆国

推薦者:杉田直人(足柄上エリア マネジャー)
潤生園に入職し今年で20年。短期入所・特養・地域包括・ケアマネ・小規模多機能を経て、現みんなの家南足柄(地域密着特養)の施設長。ご利用者ファーストを常に心掛ける。プライベートでは一児(4歳)の父親。
趣味:コーヒー豆挽・ゴルフ　好きな物:お肉　苦手な物:茄子・トマト

NEWS

よりあいどころ螢田が開所！

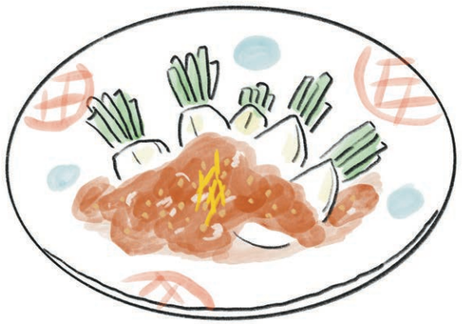
2023年11月1日「潤生園よりあいどころ螢田」が開所となりました。
当法人として2棟目となる、認知症高齢者対応型のグループホーム、現在入居者を募集中です。お気軽にお問合せください。

こやわたの家が開所！

2023年12月1日「潤生園こやわたの家」が開所となりました。当法人初の障害者グループホームとなります。
障害を抱える方々それぞれが困難に感じる場面のサポートを行いながら、多くの人との共同生活の中でコミュニケーションを図っていただき、自立した生活を送っていくために設けられた住まいです。
今後は市内各所に展開していく予定です。どうぞご期待ください。

潤生園の台所

かぶのそぼろ味噌かけ



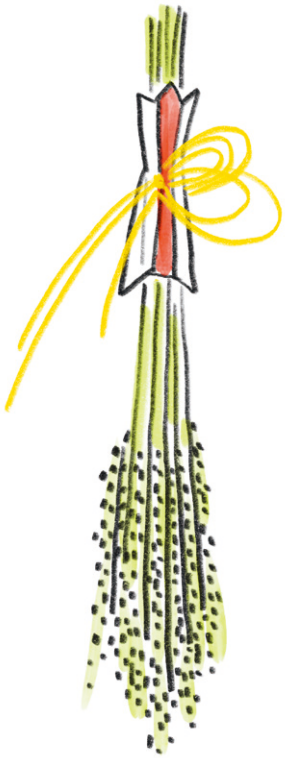
【材料】4人分(電子レンジで加熱する場合)

かぶ	**4個(ひとり分60g程度)**
白だし	3.6g
水	68g
砂糖	2g
※鍋でつくる場合は、かぶが煮える程度に何倍かに増やしてください。	
そぼろ味噌	
鶏ひき肉(もも)	60g
味噌	22g
砂糖	28g
みりん	5.4g
おろし生姜	2g
ごま油	2g(最後に加える)
トッピング	
ゆずの皮	少々

1. かぶは少し葉を残して葉を切り落とし、皮を剥いて串切りにカットする。
2. 電子レンジで加熱する場合は皿にかぶを並べ、下味用の調味料を加える。
3. ラップをふんわりかけて600Wで2分～。硬さを見て時間を調整してください。鍋の場合は、鍋にかぶが煮える程度の下味用の調味料を入れて、竹串がすっと通るくらいまで煮る。
4. 鍋に調味料を入れて、よく混ぜたら弱火にかけて砂糖と味噌をよく溶かし、滑らかになったら、ひき肉を加えて、菜箸で肉がパラパラになるようによく混ぜる。
5. 肉に火が通ったら火を止めて、ごま油を回し入れる。
6. 1のかぶを器に盛り、そぼろ味噌をかけて、天盛りに柚の皮を添える。

かぶの皮は少し厚め目に剥くとやわらかく食べることができます。残った皮や葉は塩もみしてから水気を切り塩昆布で和えて時短漬物に。

尾上千鶴
みんなの家南足柄特養の栄養ケアとれんげの里の厨房で毎日楽しく働いています。
人生の半分以上を潤生園で過ごしています。趣味は、食べ歩き、体重維持に苦戦する毎日です。



編集後記

お正月が過ぎてから、無病息災を願って松飾やしめ縄を燃やす小田原地域の伝統行事「どんど焼き」。色とりどりのお餅をお団子やお汁粉にしていただきます。裏表紙は五穀豊穣を祈る稲穂飾りです。新しい年がみなさまにとってよい年になりますように。

潤生園ニュースレター「うるる」vol.7

発行日　令和5年12月
デザイン　TAICHI ABE DESIGN INC.
撮影　橋本貴雄(P2～5)、牛山惠子(P8～10)
イラスト　落合恵
編集　牛山惠子(合同会社スタジオパンダ)
大谷薫子
執筆　牛山惠子(合同会社スタジオパンダ)
酒井直子
発行者　社会福祉法人
小田原福祉会 うるる編集部
神奈川県小田原市穴部377
https://junseien.jp